

# DOKUーGAKU

ー読書を楽しむ会ー

6月標準号 vol. 5



# 目次

|                           |    |
|---------------------------|----|
| メンバー紹介・規約 .....           | 2  |
| 特別企画 ― 「初めての出会い」 .....    | 3  |
| がみちゃんの映画道 その2 .....       | 11 |
| テレビデオ鑑賞記 担当 ちかちゃん .....   | 12 |
| 健ちゃんの出版社テレカ .....         | 13 |
| コレクション ― 第3回              |    |
| 読書リスト（2000年4月・5月） .....   | 16 |
| yukoさんのショートストーリー .....    | 26 |
| 作家紹介―時実新子 担当 yukoさん ..... | 28 |
| 表紙は語る .....               | 28 |
| DOKU－GAKU掲示板 .....        | 29 |
| 次号予告 .....                | 32 |

## 読書を楽しむ会メンバー紹介

〔NAME CODE〕

|     |       |            |                                                                          |
|-----|-------|------------|--------------------------------------------------------------------------|
| 001 | 会長    | 健ちゃん       | <a href="mailto:fwnx7968@mb.infoweb.ne.jp">fwnx7968@mb.infoweb.ne.jp</a> |
| 002 | 副会長   | がみちゃん      | FAX 045-573-5440                                                         |
| 003 | 書記・総務 | あみちゃん      | <a href="mailto:ami77@infoweb.ne.jp">ami77@infoweb.ne.jp</a>             |
| 004 | 企画・会計 | ちかちゃん      | <a href="mailto:chicako@shogo.com">chicako@shogo.com</a>                 |
| 005 | 編集・総務 | かよこちゃん     | <a href="mailto:kayokoma@infoweb.ne.jp">kayokoma@infoweb.ne.jp</a>       |
| 006 | 相談役   | うさお        | <a href="mailto:ismasuda@infoweb.ne.jp">ismasuda@infoweb.ne.jp</a>       |
| 007 | 会員    | y u k o さん | <a href="mailto:shiro@hi-ho.ne.jp">shiro@hi-ho.ne.jp</a>                 |

## 規 約

その1 読書・音楽・映画を楽しむ気持ちを常に持つことを会員の資格とする。

その1 会員の自主性を重んじ、ゆるやかなつながりで長続きするサークルを目指す

その1 会員は報告書をFAX・メール等で総務に連絡し、総務はそれを会報にまとめて会員に発送する。会報は二ヶ月に一度発行するものとする。

その1 年間を通じて読書数が最多の会員は日本文学界に貢献したものとして表彰される。

その1 会費は原則として0円とする。

その1 会員相互の話し合いによって、規約の追加、削除、変更を行う。

以上

## 6月号特別企画

### 〈初めての出会い〉

人との出逢いだけでなく、本や映画や唄などとの出逢いも  
人の生き方に影響を与え、また豊かにしてくれるものですよね。  
そこで今回は、みなさんに  
「初めての出逢い」 について語ってもらいました。

#### 特別ゲスト綾美ちゃん

私が初めて読んだ本は多分シンデレラです。

「きれいでやさしいしんでれら」と声に出してそこばかり読んでいた  
と親が言っていました。

子どもの時は本ばかり読んでいて、「飛ぶ教室」とか「八犬伝」「巖窟王」  
「小公女」。小学校4年生の時読んだ「銀のスケート靴」はこの題を聞いた  
ただで、図書室の匂いを思い出します。

「めぐり逢えたら」って映画の中でメグ・ライアンの  
＜「銀のスケート靴」が絶版になったの＞  
という台詞があって私はあの映画を観たとき本当にびっくりしました。  
「銀のスケート靴」は私の好きな本だったので、いろんな人に言った  
けれど誰も知らなくて。  
でも映画に出てくるこのたった一言は  
この台詞だけでこの映画を私は評価したいくらいです。



そのつど感動してるような気がします、大人になってからの中では  
藤原ていの「流れる星は生きている」とパールバックの「大地」です。  
どちらも胸が詰まります。

映画は「風邪と共に去りぬ」、これしかないですな。

1部が終わる直前で涙が出てしまい2部になる前に、劇場内が明るく  
なるのがつらかったです。



## 002がみちゃん

### <映画>

隣りにあった映画館に、幼いころフリーパスではいていたこともあって、東映まんが(「白蛇伝」とか)、怪獣ものや若大将シリーズなんかよく見たなあ。

映画は、だから楽しむものだった。

けれど「ミッドナイト・エクスプレス」を観てびっくり！特にラスト近く、持っていた荷物を落としてしまうほどの衝撃を受け、映画館を出てからも友人から、大丈夫？といわれるほど、ホーシン状態だった。その後しばらく変でした。



### <漫画>

初めてのマンガといえば、貸し本屋。ハードカバーの怖いマンガや、見たいけど読んでも難しいだろうと思って借りなかった「ガロ」とか青年誌(ちょっと記憶があいまい)。

少し暗くって、少し汚くって、いっぱいわくわくしてた。でも店のおばさんが「本、返しなさいよ」って因縁つけて、頭きて行くのを止めてそれっきり……。懐かしい。



### <推理小説>

読書感想文が大嫌いで、裏にあらすじが書いてあったので飛びついたのが「五人と一匹探偵団」(E・ブライトン)。思えばこれが推理小説の第一歩。ルパンやホームズ、江戸川乱歩も読んでいたけれど、初めてといったらこれが浮かんた。以来、推理小説好き。

007yukoさん

初めての出会い…うーんいろいろありすぎて困ってしまう…

で、考えた末大好きで、尊敬もしていて、私の若さと元気の源である、「浜田省吾」との出会いについて、書く事に決めました。

## 『初めての出会い～浜田省吾』

浜田省吾の名前を知ってから、早いものでもう24年が経つ。最初は、吉田拓郎のバックをやった事がある人っていう程度で、「あー浜田省吾…？ドラムやってた人よね」カワイレコードショップの男の子から、知ってますかとパンフを見せられて、うなずいた。「今度ソロデビューするんですよ、うちでライブあるんで…」ポスターには、ギターを抱えて脚を開いたサングラス姿の省吾の姿があった。“僕の部屋には鍵が無い、背景は、それぞれの配役であった”…汚い字…(省吾さん、ごめんなさい)意味不明の詩(とその時は思った)が、ポスターの横に貼ってある。「頭悪そう…」(またまた、ごめんなさい)でも、運命の女神は二人を出逢いへと導く…ちょっと仲良しになっていたその店員が、半ば強引に誘ってくれたから。子持ちの人妻23歳にとってそれは、ほんのアドベンチャー…(その子結構、カッコよかった)不純な始まりではありました。

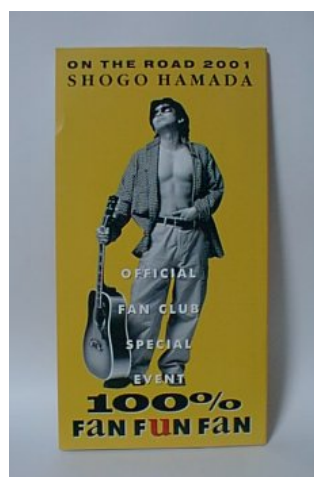
会場は、カワイレコードショップの4

階にあったホール、ホールといっても、せいぜい2、30人が入れる程のところで、椅子がはずされ、観客はみんな、床の上に(もちろん敷物はありませんでしたが)直接座って、浜田省吾なる、新しいミュージシャンと対面した。

“ひとめぼれ”。そういう下世話な言葉は使いたくないのだけれど、まさに一目で、省吾のすべてが解った。写真とは、またちがう、孤独の影と、育ちの良さそうな清潔感と…男はこうでなければ…しかも、ギター一本で、歌いはじ

めた時のその声、全部が、私の求めているものだった。

何を歌ったか、何曲歌ったか、はっきりとしない。(片想いが、今とはまったく違う歌詞で、歌われていたと思うけど…誰に聞いても知らないと言われる)



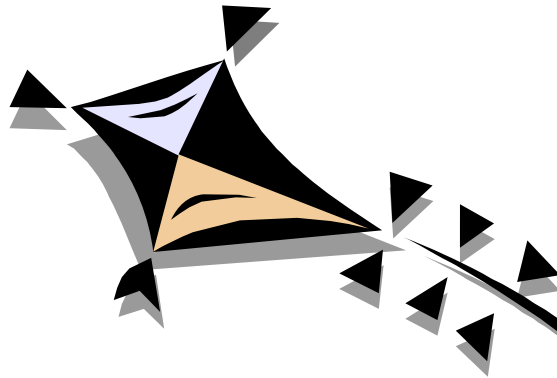
合間に入るぎこちないMCにこちらの方が熱くなりながら…私は、すっかり彼の虜になっていった。何よりも、ジーンズにラフなシャツ姿の彼が、私と同じ1952年12月生まれだと知った時、オーバーでなく運命と言うような物を感じてしまった。胸がキュッとしめつけられた。

「レコード買ってください。貧乏なんで」冗談ぽく言っていた彼が、いつしか世間に受け入れられ、ビッグアーティストと呼ばれ始めて久しい。アルバムがチャートの1位を取り、コンサートチケットはなかなか手に入らなくなった。毎月2回決まったように広島に帰ってライブを行っていた彼…私達の浜田省吾は、いつのまにか手の届かない、でも、願いどおりの



大きなミュージシャンになっていった。  
うれしさと、誇らしさと、そして少しの淋しさを昔からのファン仲間は、みんな持っているらしい。病気でドクターストップがかかってもライブを止めなかった省吾を、歌いたくないと心で叫びながら、でも走り続けなくてはならなかった省吾を、私達はいつも見てきた。

今、本当に歌いたい歌を、何よりも自然な気持ちで、決して無理をすることなく歌っている省吾に、心からの拍手を送りたいと思う…  
ありがとう…省吾！あなたは、私達の自慢の同志、そして初めて逢った時からずっと私の永遠の恋人…



夜が巨大な腕（かいな）を拡げて  
眠りを優しく抱きしめる頃  
もう一人の自分が ゆっくりと目を覚ます  
透明な夜の底 心がゆったりと呼吸しはじめ  
僕は本当の僕へ還って行く  
真実の君ともう一度初めから出逢い直す為に

一度は粉々に砕け散ったガラス瓶のかけら  
その淡青い光を拾い集めながら  
僕は泳ぐように月光を進む  
君の待つ光の海の果ての国で  
一からまたはじめる為に…

（省吾の詩の中で、私が一番好きな詩です）

## 004ちかちゃん

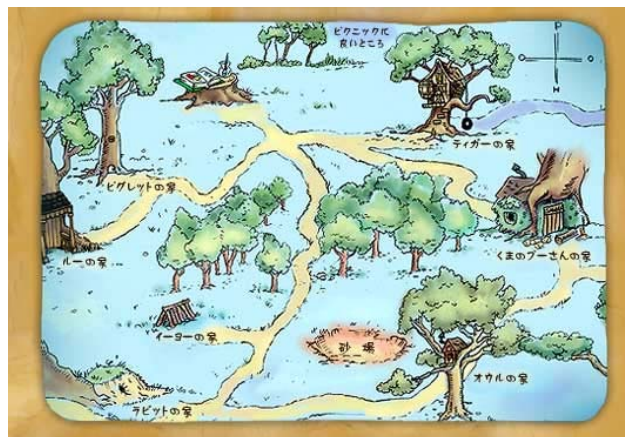
### <こども篇>

本：「王子とこじき」

人と生活を取り替えてみたって、  
自分が変わらなくちゃ同じだと思うの  
は、おとなの読み。

映画：「狼少年ケン」

いつもいつも崖から落ちてペしゃんこ  
になる学習しない熊に同情していた。



漫画：「冒険王」「漫画王」「マーガレット」「少女フレンド」

健ちゃんが少年漫画、姉が少女漫画を買って交換していたので気がついたらすでに漫画を読  
んでいた。そのうえ貸し本屋さんの常連で「ロボット3等兵」や「エスパイ」まで読んでいた。

レコード：「アイム・ア・ベリーバー」

クラスの子たちがタイガース、テンプターズに騒いでいた中、TVの「ザ・モンキーズ」が好き  
で、マイク・ネスミスファンだった。ちょっと、老成している小学生。

ディズニーアニメ：小さいころ、夏になると近所の空き地で上映会をやっていた。それが今では  
綺麗な映像でお手軽にビデオで見ることができる。でも、ござに座りひざをつき合わせてみん  
なで見た「白雪姫」は楽しかったなあ。



### <おとな篇>

本：山本周五郎の「野分」という短編集の中に入っている（多分）「つゆのひぬま」という小説を  
読んだときは、こんな話の終わり方もあるのかと思った。当時の私は、つたない漫画を描いて  
いて話作りをラストシーンから決めていていたので、余計に印象的だったのかもしれない。

映画：「心の旅」なんて安っぽい邦題の映画を、H・フォードのファンと一緒に見に行くと、  
不覚にも泣いたのは私だった。映画館で涙が止まらなくて困ったのは、「ディープ・インパク  
ト」。ここが泣き所、というのにももの見事にはまる。



漫画：「綿の国星」でヒットを飛ばすずっと前の大島弓子の漫画が好きだった。絵はそれほどうまくなく、話も短くて地味だったけれど、心惹かれるに十分なせりふや表情があった。

この人以外の感動した漫画家さんたちのことは、以前の漫画特集と重複するので省略します。



レコード：ツェッペリン、G F R、シカゴ、S & G……から明らかに B 級音楽というものまで、ごちゃ混ぜで洋楽がはいってきた 1970 年代。そして、ビートルズの解散のころからフォークの全盛を迎え、私も、いわゆるニューミュージックへと移行。今ではすっかり変貌を遂げた吉田拓郎、今でもがんばっている陽水や R C、古井戸、がみちゃんのアイドル・加川良さん……。

コンサートにもよく行き、音楽を楽しんでいただけて充分だった 10 代のときから 20 年以上の時を経て、微かに残っていた感受性で探し当てた人との出逢いが、やっと出逢えた初めての感動なのかも。

ね、省吾さん！ はーとはーと

ビデオ：友達に誘われて初めて行くコンサートの前に、どんなライブなのか学習しておこうとビデオを借りてきたら、あまりに素敵だったので思わず買ってしまった浜田省吾の「ON THE ROAD FILMS」。買った私に間違えはない、払ったお金に損はない。

< 勝手に飛び入り参加・浜田省吾 >

初めて買ったレコード：

『Ticket to ride』

初めて唄った R&B：

『A place in the sun』



## 005かよこちゃん

～ちょっと男の子気分で～

「少年探偵団」シリーズ 江戸川乱歩

真夜中の薄明かりの中、月に照らしだされたのは三日月型に  
裂けた口を持つ「青銅の魔人」

莫大な遺産のありかを記した暗号を解読し、迷路のような  
鍾乳洞にたどりつく「大金塊」

少年が跡をつけていた男は、少年達の目の前で服を脱ぐ。

そこには男の姿はなくなっている「透明人間」

血湧き肉踊るという形容にぴったりの探偵小説に、霧の舗道、  
翻る黒いマント、三角屋根の邸宅、サーカスの少女、小人……  
想像力を刺激されるもの達が多彩に登場してくる。

西洋的な趣と大正・昭和初期の日本の風景が混ざり合い、独特の  
暗さを持つノスタルジックな世界を作り上げている。

- 26.二十面相の呪い
- 27.黄金仮面
- 28.呪いの指紋
- 29.魔術師
- 30.大暗室
- 31.赤い妖虫
- 32.地獄の仮面
- 33.黒い魔女
- 34.緑衣の鬼
- 35.地獄の道化師
- 36.影男
- 37.暗黒星
- 38.白い羽根の謎
- 39.死の十字路
- 40.恐怖の魔人王
- 41.一寸法師
- 42.蜘蛛男
- 43.幽鬼の塔
- 44.人間豹
- 45.時計塔の秘密
- 46.三角館の恐怖



そして、私にとって「初めて好きに  
なった男の子」は小林少年だったような  
気がする。両親もなく、天涯孤独な  
身の上の彼は、明智先生の愛を得るため  
に、あんなに一生懸命、少年探偵団を  
率いて行ったのか。明智夫人である文代さんも、その生い立ちは  
明智探偵を亡き者にしようと追いかける「魔術師」の娘。

登場人物達もどこか暗い影を背負っている。

とにかく私のミステリー好きのベースになった作品達だと思う。  
あの頃、B・Dバッチと探偵団手帳にどんなに憧れたことか…

なつかしいなあ～

- 1.怪人二十面相
- 2.妖怪博士
- 3.少年探偵団
- 4.青銅の魔人
- 5.大金塊
- 6.透明怪人
- 7.怪奇四十面相
- 8.地底の魔術王
- 9.電人 M
- 10.宇宙怪人
- 11.奇面城の秘密
- 12.黄金豹
- 13.サーカスの怪人
- 14.夜光人間
- 15.塔上の奇術士
- 16.仮面の恐怖王
- 17.鉄人 Q
- 18.魔法博士
- 19.灰色の巨人
- 20.魔人ゴング
- 21.海底の魔術士
- 22.空飛ぶ二十面相
- 23.悪魔人形
- 24.鉄塔王国の恐怖
- 25.黄金の怪獣



～どっぴり女の子の世界で～  
「秘密の花園」 バーネット

19世紀のイギリスが舞台。父母を失くした少女が  
ヨークシャーの伯父のもとに引き取られ、10年間誰も  
入ったことのない「秘密の花園」を発見し、そこに住む  
孤独な車椅子の少年と出会う。

ひねくれた子供だった少女が、「好き」という感情を初めて知り、鳥と話す少年、その母親から「愛」を学び、車椅子の少年と父親との奇跡の対面へと導いていく。

「秘密の花園」の扉を開ける瞬間のわくわく感、親子が理解し合う幸せなラストが、たまらなく好きだったなあ。



「雪の女王」

アンデルセン

—七つの話からできている物語—



鏡のかけらが心に刺さり、優しい心を忘れ、雪の女王とともに氷の世界に行ってしまった幼なじみの少年を追って、旅の途中で出会う人達（カラスや花やカエル達も）の助けを借りながら成長していく女の子の物語。雪の女王から男の子を助けだすために勝つ力を与えて欲しい、という女の子に「その力は自分の心の中にちゃんとある。」と答える不思議なおばさん。子供が欲しくて美味しい食事やふわふわのベッドで少女を手元においておこうとするおばあさん、少女は何か大切なものが欠けていると思い続け、ある日少年の事を思い出し、再び辛い旅路に踏み出していく。童話という単純明快な文章の中に、幸せとは、愛とは？という問いに対する答がちりばめられているように思える。アンデルセンの世界は本当に大・大・大好き！

- ☆D-G特別企画をきっかけに、「秘密の花園」「雪の女王」を、また読み返してみました。☆
- ☆そして思う事は、なァーんだ、小さい頃と好きなものって何にも変わってないじゃん！ ☆
- ☆ということ。今ふと思う事が返って明快に書かれている、そんな印象を受けました。 ☆
- ☆何もかもが過剰に見えるこの頃、シンプルにいろいろなものを削ぎ落として行きたいと、 ☆
- ☆つくづく感じます。「11人の白鳥の王子」「ラプンツェル・ラプンツェル」「銀のスケート ☆
- ☆靴」他、好きなお話はたくさんあります。それにしてもしみじみ思うのは、何で童話って ☆
- ☆3番目のお姫様が必ず主人公なの？2番目のお姫様が主役だっていいんじゃない？（私、 ☆
- ☆3人姉妹の真ん中です。）そう思いませんか？ ☆

## がみちゃんの映画道

年をとると感動することが少なくなって、映画を見ても泣けない自分を淋しいと思うけれど「E.T」だって「ライフ・イズ・ビューティフル」だって泣いていない。

でも「はたらの墓」は考えただけで泣くぞ私。要はみんなと泣く観点が違うだけなのか？

DGやっていると自分はみんなと少し違うのかなと思うことがあるけれど、

いいの「私は私よ、もともとこんなよ なんだから」。

でも、もっと変わっている人は、確かにいる。(誰だ？その人は・・・)

「グリーン・マイル」

＜川崎チネチッタ＞

中途半端な娯楽映画。スティーブン・キングは映画化を許したのかしら？

原作を読んでいないからなんともいえないけれど、娯楽を追求するならもっと違う展開のほうが面白かった。超人類と思わせておいて(私は宇宙人かと思った)

あの結末はないんじゃない？「ショーシャンクの空に」のような晴れ晴れとした

余韻も、心の深いところも、人生の機微も感じなかった。

中途半端な感動だけでは泣けない！アメリカ映画の限界を感じさせる映画だった。

(何をえらそうに言ってんだろう、私・・・。ほんの少し反省)

「ストレイト・ストーリー」

＜シネスイッチ銀座＞

私は映画に来ている人も気になるわけで、この映画は年配のご夫婦で来ている人が目立ったなあ。

後はいつもどおり。でも主婦はいつもより少なかったかなあ。若いコも多かったけれど。

映画が終わっても眠っていた二人には笑えた。

映画の中で「年をとって最高なのは？」と聞くと「経験を積んだことだ」って答えるの。「じゃあ最悪なことは？」と聞くと「若いときのことを覚えていることだ」って言うんだ。——泣けた。

確かに老いは私にもある。でもオーバーラップするのは、自分の父や母。彼らの老いに直面している私がこの映画を見ると辛い。主人公は頑固で何でも出来、あまりしゃべらなくて何事にも動じない。けれど動作は若いときに比べたら鈍くなっている。でも彼は目的をやり遂げるわけで、今まで生きてきて実績も自信もあるんだよね。

年をとることはゆっくりと、でも確実に時が過ぎていくことなんだ。年をとってうんぬんより、広い土地とゆったりとした時間がうらやましかった。何かに急かたてられて自分を見失いながら生きていくのはつまらないなどと、いろんなことを考えながら映画を見ていた。

一つ一つの言葉の重みに涙した。

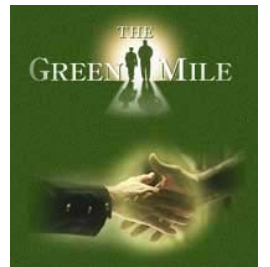
映画館を出たら、銀座の街には人がいっぱいいて、忙しそうで、これじゃあ正しく年をとっていくことは出来ないかもしれないと思った。

「セントラル・ステーション」(BS)

ブラジル映画。綺麗な人もカッコいい人も出てこない。どこにでもいる人たちがただ生きているって感じ。イタリア映画っぽくて、人々は忘れていた優しさを取り戻し、忘れられない思い出が出来て元気に生きて行くって映画。私は好き！いいもの観せてもらいました。

おことわり:4号の「おすすめの1本」(P.6)の「ちなみに「栄光のル・マン」・・・は

120点(満点以上)」とある中に「七人の侍」を入れておいてください。





## テレビデオ鑑賞記

担当ちかちゃん

|                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |           |
|----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| ギルバート・グレイブ                                                                                   | 知的障害者役の幸せそうなR・ディカプリオがよかった。<br>なんだ、あの人は「タイタニック」が、よくなさすぎるのね・・。<br>優しすぎるジョニー・デップに歯がゆい思いをしたけれど、そうしないと本人も幸せになれないんだろうなあ。                                                                                                                                                                                                                                                  | ☆☆☆       |
| プライベート・ライアン                                                                                  | ビデオで見たので、まるで最初の戦争の場面は迫力が違うと思うけれど、私にはちょうどよかった。回想から始まるやり方にすっかりだまされて結末を迎えたので、余韻の残る映画となりました。トム・ハンクスの映画ってつい見てしまうけれど、「スプラッシュ」以外は、恋愛映画じゃないほうが好きです。                                                                                                                                                                                                                         | ☆☆☆☆      |
| ブレイド                                                                                         | がみちゃんの前回の批評どおり、まさしく B 級娯楽お笑い映画。「マトリックス」より面白い、との批評にがみちゃんのこだわり（または偏り）を見た思い。                                                                                                                                                                                                                                                                                           | ☆☆        |
| マトリックス<br> | 映画の作りに、「スター・ウォーズ」以来の新しさを感じた。CGを多用しているので、もっと娯楽色の強い映画だと思って観たら、現実だと思っていた世界が実は仮想のものだった、という始まりで結構怖いものがあり(この疑いは実は私も持っていた)、話自体も難しかった。最初は生理的に受け付けない場面があつてきつかった。(「もののけ姫」にはまるで及ばないけれど)<br>キアヌ・リーブスは、復活したなって感じ。黒いコートにサングラス姿でやっと登場した時には、掛け声の一つもかけたくなかった。(「ブレイド」のほうは最初からその姿で登場した)銃弾をよける有名なシーンが、終わりのほうに1回しかでてこなかったのは意外。<br>せっかく派手に作っているのだから、何も考えさせてくれなくていいから、ただ単純に楽しめる映画にして欲しかった。 | ☆☆☆       |
| パッチ・アダムス                                                                                     | 昔、日曜日の午前中に放送していたアメリカのTVドラマでにせ学生の「学園は大騒ぎ」を思い出した。(比較的有名な「じゃじゃ馬億万長者」の前の時間に放送していた)と、ということとはともかく ロビン・ウィリアムスもまたよく見てしまう役者さんの一人で、妙に信頼感を持ってみてしまう。                                                                                                                                                                                                                            | ☆☆☆       |
| 8 mm                                                                                         | ニコラス・ケイジの、泣きそうな顔に強い身体、というのにやっと慣れてきた。ちょっと怖そうでどきどきする映画かと思ってみたら、悪役はまるっきり弱いし、素敵な人は出ないし、話はおざなりだし。救いは赤ちゃんがすごくかわいかったってだけ。(シンディという名の娘を、N・ケイジはシンデレラと呼ぶ。アメリカしてるなあ。)                                                                                                                                                                                                           | ☆         |
| ライフ・イズ・ビューティフル                                                                               | すごく期待してみた映画だったので、その分を差し引いても退屈なファンタジー映画。話の展開に最初の1時間は、これほんとに「ライフ・イズ・・」だよね？と確かめずにいられなかった。                                                                                                                                                                                                                                                                              | ☆☆        |
| 学校 III                                                                                       | いい人ばかりが出てきて、ちゃんと最後には泣かせてくれる映画、大好き。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | ☆☆☆☆☆     |
| 第三の男                                                                                         | あまりにも有名な昔の映画。話を作るプロが絶賛していたことを思い出して見てみた。——半分は寝てしまった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | z z z ... |

## 健ちゃんの出版社テレカコレクション

### 〈第3回 ビッグコミック編〉

青年コミック誌のさきがけとなるビッグコミックの創刊からもう30年以上もの月日がたってしまいました。

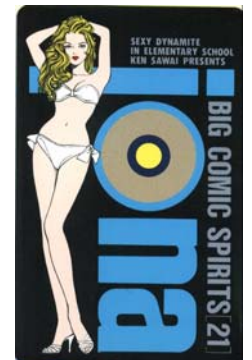
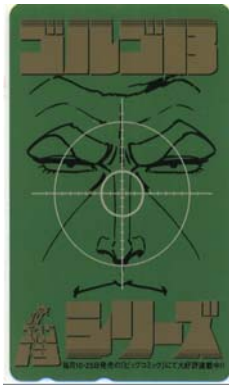
以来、質の高い、安心して読める作品を世に送り出し続けています。

感謝を込めて、今月のテレカ特集はビッグコミックの作品たちです。

#### 《表紙》



# 《作品》





## 健ちゃんの『ビッグコミックと僕』



オリジナル、スピリッツ、スペリオールと兄弟雑誌はたくさんあるけれど、やっぱり語るとなれば基盤であるビッグコミックでしょう。何と言ったって、表紙がいい。初代伊坂芳太郎さん亡き後、ずっと似顔絵を表紙として描きつづけた日暮修一、その人自身の世界を表紙という限られた空間に完璧に創りあげています。その作品には風格さえ感じてしまいます。

ちなみに記念すべき第1回目の表紙になった人物は、佐藤栄作元総理でした。



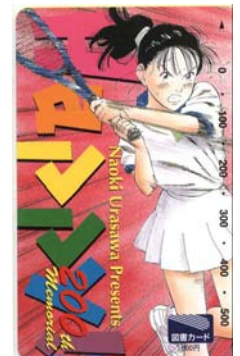
手塚治虫、白土三平、横山光輝、水木しげる、さいとうたかお、石森章太郎、6人の大家が集まった本格的青年向けコミック誌。当時としては、これだけ有名な漫画家を一堂に集める事だけでも画期的な事でした。その中でも、創刊時から連載している「ゴルゴ13」は、現在も連載中。当時、僕は高校1年。さすがに今もつづいている漫画はこれだけですが、なんたって、すごいとしか言えません!! ビッグコミックの対極にあるのが、「少年ジャンプ」。巨匠を集めるのではなく、新人作家だけで、一冊の雑誌を作り、御存知のとおり「ドクタースランプ」など、多数の名作漫画を誕生させました。

ビッグコミックの長い歴史の中で、面白かった漫画をあげるのは、ちょっと難しい気もしますが、思いつくものだけでも挙げてみれば、「シュマリ」

「きりひと讃歌」「陽だまりの樹」という一連の手塚治虫の青年漫画。

そして、同名の小説を原作とする森秀樹の「墨攻」。具体的な戦争、戦略描写は、原作を拡大し、それを越えた面白さがありました。

ちばてつや「のたり松太郎」もよかった-----と、書いていくと本当にキリがなくなってきそうです。



## 読書リスト(2000・4月・5月)

☆ つまらなかった

☆☆ まあまあ

☆☆☆ 面白かった

☆☆☆☆ とても面白かった

☆☆☆☆☆ とってもとっても面白かった！

### 006 うさお

さて、今回は『サイコメトリック・キラー』について  
あいかわらず図書館に行って、タイトルだけで本を探し出す。これって結構いい確率で面白い本に当たる。作者に頼るとすげえ駄作にぶち当たることもあって、この人如何しちやっただろうと、違う意味で考えさせられますが、タイトルの直感は七割打者位の検討かな。

少ないですよ。高村薫とか桐野夏生とか黒川博行とかって、スラッガーは！

タイトルの選び方に私はクセがあって(いや、身から出るやや隠微な嗜好が影響するんですけど…)、大体借りてくる本の傾向が同じになります。幅が狭くなると言う欠点はあるんですが、自分が面白けりゃいいんだからね。

よしなごとはよして  
閑話休題。『サイコメトリック・キラー』ですが、本の歌い文句には、「スピルバーグ映画化のハイテンション・サスペンス」、「ステイブ・スピルバーグがサイコ・サスペンス小説を映画化！」とあります。まだ書かれていない「小説の映画化権を、スピルバーグが百万ドルで獲得したという」と言うものです。本当かな？、でもこの映画の宣伝なんて一度も聴いたことがないぞ。話は漫画、TVでおなじみの鋭二が活躍する『サイコメトラ』だって、事はないぞ。あちらものだからね。主人公は家族を異常者に殺された男が自分も異常者になり(「サイコメトリー」の能力が突然でちゃうですね、ショックで)、そのリベンジで「異常殺人鬼ばかりを標的にする連続殺人犯」になっちゃうという話。

「サイコメトリーとは、人の心が読めるばかりか、物に触れただけで過去の出来事が感知できる特殊能力のこと。主人公のデイヴィッド・ヴァンデマークはこの能力を使い、警察に先んじて次々と異常殺人者たちを葬っていく。このデイヴィッドを追うのが、FBI 捜査官のアイラ・レヴィット。七年間、あくなき執念で捜査を続けている、一徹の男だ。やがて追う者と追われる者は、ついに顔を合わせる。だが、そのとき事件は、二人の夢想だにできなかった方向へ…」

と確かにフィジティブやXファイルを彷彿させるプロットであり、無名の新人という割にはすごく読ませる。読ませる。読ませる。

で、大変興味深かったのがこの作者である。ダイナ・グラシウナスとジム・スターリンという。二人は夫婦だったのらしいのだが、今は離婚しているとのこと。

ダイナ・グラシウナスという人は、イラストレーターであり、インダストリアル・デザイナーであるらしい。ニューヨークで手がけた広告には、宝石店のティファニーやプラザ・ホテルのものがある。彼女は、「殺人事件に関連した”記念品”の収集家」としても有名のようで、そのコレ



クションのなかに、連続殺人鬼”切り裂きジャック”が使用したナイフもあるそうだ。

もとかれのジム・スターリンは、アメリカン・コミックのストーリー・ライター兼アーティストだそうで、「スーパーマン、バットマン、スパイダーマン、Xメン、ファンタスティック・フォー、キャプテン・マーヴェル」を手がけているという。(私は知らないなあ！)

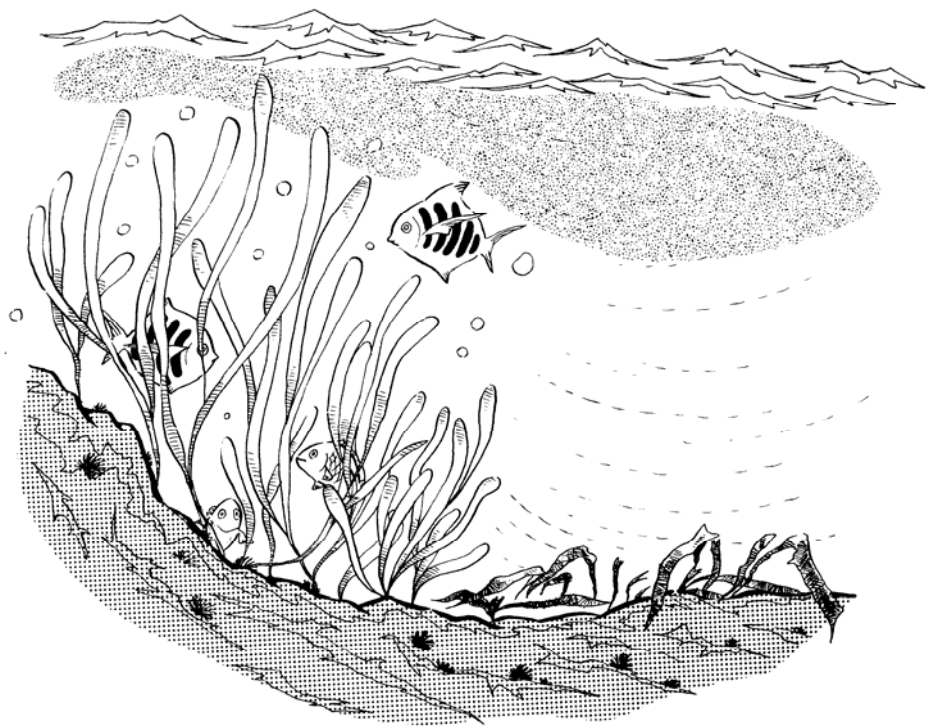
こうして考えると才能のある人は、一つ事だけでは無く才能が煌くジレタントなのかもなあ。大量得点を散発的に叩き出す巨人のようで、うらやましくももったいない思いがするぞ。

憧れましたね、昔。何でもできるウルトラマン。青春時代は自分の才能の見極めに右往左往しましたよね。私の場合、漫画の同人誌やクイアータイスト(奇妙な味)と呼ばれるSFまがいの同人誌を興していました。映画のカメラマンの才能ないかと、8mmにも凝りました。フィルムです。でも、プロ向きの才能は見出せませんでしたね。もうちょっと努力をすれば報われたのかも。って気持ちを抛り所にして今を生きています。(´o´)

という事で、今回は「サイコメトラー・エイジ」でした。って違うでしょ！

| 題名           | 作者名                | 感想                                                                                         | 評価    |
|--------------|--------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| 闇の足跡         | 柘植 久慶              | この人と加納典明は、見た目も言うこともそっくりだぞ。文章力は大藪春彦並み。プロットはそれよりちょいといいか？一連の連作もの。白土三平の忍者ものを読んでいるようで、マニアックな作品？ | ☆☆    |
| 空夜           | 帚木 蓬生              | この人も余り取りこぼれない人で、大体に於いて面白いが、逢坂剛と同じで作者の嗜好を読者が誤ると大変つらい作家です。                                   | ☆☆☆   |
| 天女の末裔        | 鳥井 加南子             | 取りこぼれてしまったぞ。加奈子さん！失敗作です。これは。シチュエーションが陳腐ですし、タイトルで内容がばれてしまいました。                              | ☆     |
| 役小角          | 黒須 紀一郎             | 今や日本神道は阿倍野清明でブームになりました。そのつもりで読むと少し固いぞ、この本は。                                                | ☆☆    |
| 夜は罌をしかける     | 加治 将一              | 意外に読めた。作者は知らない。タイトル付け術は中の下。                                                                | ☆☆☆   |
| リミット         | 野沢 尚               | 面白い。この人は面白いぞ。そう言えば以前にもこの人の作品を読んだことがあるぞ。家内は有名な作家だぞ、知らないのかと尋ねてきた。知ってるってばあ。TVドラマでしょ？          | ☆☆☆☆  |
| 血ダルマ熱        | 響堂 新               | エボラ熱のような新種の伝染病の話。立ち向かう女医。よくあるプロットだけど、貞子とウィルスは後ろに來られても判らないから嫌いだ！                            | ☆☆☆   |
| 忌まわしい匣       | 牧野 修               | いやあ、読めない。読む気がしない。私が同人誌時代に書いた「扉」と同種のもの。青春と血塗られたスプラスティック。                                    | ☆     |
| サイコメトリック・キラー | D・グラシウナス & J・スターリン | 面白かったです。                                                                                   | ☆☆☆☆☆ |

|               |                      |                                                                                                                                                                                           |           |
|---------------|----------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| ハーメルンに<br>哭く笛 | 藤木 稟                 | 夢枕獏さん。こんな作品にまで提灯を持たないで<br>ください。つい借りちゃいました。おどろおどろ<br>しい作風。見ると作者は風水あがりの神秘的な女<br>性。これですか？押したのは。                                                                                              | ☆☆        |
| 文福茶釜          | 黒川 博行                | 元高校の美術教師だった作者が、美術品、骨董品<br>に対して、自身の蘊蓄を題材に書きあげた作品。<br>細野不二彦の「ギャラリーフェイク」と一緒に読<br>むと面白いです。                                                                                                    | ☆☆☆☆<br>☆ |
| 兇器            | 高森 真士                | いやあ参った。真樹日佐男?の作品。いやー、陳腐<br>でチープ。すごい！                                                                                                                                                      | ☆         |
| 花散る頃の<br>殺人   | 乃南 アサ                | すいすいと読める。手軽でいいな。内容はさほど<br>ではないな。                                                                                                                                                          | ☆☆        |
| おんな飛脚人        | 出久根達郎                | 時代劇作家も好きなんだけど、あんまり書き慣れ<br>ていない気がするな。ある訳があって女性アスリ<br>ートが男社会の飛脚道にはいって行く。駆け出す<br>ときにぴょんと飛ぶようなカッコをする。小さい<br>時ってそうだったな。                                                                        | ☆☆☆☆      |
| 癒されぬ傷         | リー・グルーエ<br>ン<br>フェルド | サイコサスペンスもの。主人公の女性警官は成績<br>は良いのだが子供時代からの男性恐怖症。初めて<br>つき合った男性とデート。しかし、その夜のデー<br>トは不首尾、精神錯乱を起こす彼女。その夜、デ<br>ートをした男性は猟奇的に惨殺される。犯人は彼<br>女なのか？彼女と同じくらい強い女性警察署長<br>が立ち上がるって、これも一文組みたいくらいに<br>面白い。 | ☆☆☆☆<br>☆ |



## 002がみちゃん

「再生の朝」 乃南 アサ ☆☆

昔「死者の木霊」を読んで好きになって内田康夫を読みつづけたけれど、浅見光彦旅情シリーズになってきて、すごーくつまらなくなって今では読まなくなった。作者の一貫性なんてあるようでないとは思うけれど、書きつづけることはとても難しいんだと思う。

ということでしばらく乃南アサは読みたくない。短編は好きだったんだけどなあ。

ちなみに赤川次郎も短編が好きです。

「『少年A』この子を生んで」 評価なし

読むと何ら、うちの親子関係と変わらず、じゃあうちの息子がこうなるのか？って思ったから怖くなった。

でもこの人は自分の悪かったところ、捜さなかったんだろうか？

私はいっぱいあるぞ、娘や息子に悪かったなと思う懺悔が・・・。

この人にはない。そこが違うのかもしれないって、ちらっと思う。



## 004 ちかちゃん

|               |       |                                                                                                |
|---------------|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 夏泊岬殺人事件<br>☆☆ | 内田 康夫 | 確かこの本は前に読んだことがあるのに、簡単に読み流していたせいか新たな気持ちで読めた。でも、読み進んでいってもなかなか出て来ない浅見光彦、と思っていたら登場以前の本だった・・・(^^ゞ   |
| ライン<br>☆      | 乃南 アサ | 『パソコン通信殺人事件』を改題すると同時に内容もずいぶん変えて良くなったと、あとがきに書いてあったけれど、肝心な解決するところがはちゃめちゃで、良くなる前ってのはどんなもんだったんでしょ。 |
| 氷雨心中<br>☆     | 乃南 アサ | 寝る前にちょうどいいので読んでしまう、というだけの本。それにしても、この人の本がなんでうちにはこんなにあるのでしょうか？                                   |
| 人生の目的<br>☆☆☆  | 五木 寛之 | 『他力』は宗教の話が難しくて読めなかったけれど、この本は『他力』を根底にしながらも読みやすく書いてある。題名の大大々的さに比べて内容は身近な話だった。                    |
| 悪意<br>☆       | 東野 圭吾 | がみちゃんが最悪の本、といていたので楽しみにして読んだら前に読んだことがあった。あまりにつまらなくて読んだことさえも忘れていたみたい。試しにもう一度読んだけれど、やっぱりつまらなかった。  |

|                             |                        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-----------------------------|------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 喜びは<br>悲しみの<br>あとに          | 上原 隆<br>(幻冬舎)          | 20社以上受けた会社すべてが不採用となり、もう自分の働く所などないのではないかと、落ち込む39歳の男性。道路を掃除している職員を見ても、ああ、いいな仕事があって・・・と心底うらやましいと思う。その後やっと採用が決まった時の喜びを、素直に語る彼の言葉にこちらまで、幸せな気分になってしまう。“我にはたらく仕事あれ”ひどいいじめに遭い「このまま明日が来なければいい」いつもそう思っていた14歳の女の子…23歳になって幸せな現在を生きる彼女はこう言います。「ああ、タイムマシーンに乗って、あの頃の自分に教えに行きたい、大丈夫だよって」 “タイムマシーンに乗って”…等著者が脚で集めた、心に染みるルポルタージュ・コラム。どんな悲しい事にもきつと終わりがあって、その後には、必ず喜びが待っているんだよ…著者の優しさを感じる。後味すっきりって感じです。題名「喜びは悲しみのあとに」は、キャロル・キングの「ビター・スイツ・ザ・スイート」の邦題から…<br>☆☆☆☆☆ |
| じんとくる<br>手紙                 | 時実 新子<br>(講談社<br>文庫)   | 川柳作家、新子さんのエッセー<br>辛い過去を生き抜いた彼女だから話せる、奔放な恋の話<br>現在の夫との充実した日々、<br>読んでみると、心が温かくなって来て、何か素直になれる。<br>激しさと、おっとりさと、どちらも持っている新子さんにますます惹かれてしまう。<br>☆☆☆☆☆                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| こいつが<br>ないと<br>生きては<br>いけない | 高橋 克彦<br>(講談社<br>文庫)   | ただひたすら、おもしろい！<br>直木賞作家である高橋さんは友達の知人でもあってそのユニークさは、いろいろ聞かされていましたが、ジャンルが、ホラー、SF、時代小説と言う事で、なかなか手を出せないでいました。それならばエッセー…と、読んでびっくり。おもしろい上に、ホラーや時代小説の解説(?)まであってこれがまた楽しい！<br>NHK大河ドラマ「炎たつ」原作者としての制作裏話・・・東北に生まれ現在も東北で執筆活動をしている彼の並々ならぬ故郷盛岡への思い・・・等、あっという間に読めてしまう。<br>☆☆☆☆☆                                                                                                                                                                             |
| 一絃の琴                        | 宮尾登美子<br>(講談社<br>文庫)   | さすがに宮尾登美子！すばらしい…<br>ちょうど、芸事について、考えなければならぬ事があって、しかも、ドラマ化されるらしく、少し前のものなのですが、読んでみました。<br>宮尾文学の中では、一番好きかも…<br>とはいえ、さらっと読んだだけなので、今度はもう一度じっくり読もうと、思っています。ドラマも楽しみ…<br>☆☆☆☆☆                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| ガラスの<br>天井                  | 辻 仁成<br>(集英社<br>文庫)    | 辻 仁成のものを読むのは初めて。<br>おもしろかったけれど、少し理屈っぽい所もあるかな…<br>何はともあれ、辻さんと言う人を知るのには、十分なエッセー集。<br>他の作品も読んでみたい…と言う気になるのには、もう少し…<br>この人の洗練された都会的なセンスは、好きな人にはたまらないんでしょうね。<br>☆☆☆☆☆                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 化粧                          | 中上 健次<br>(講談社<br>文芸文庫) | とにかく難しすぎる。<br>理解できないまま終わってしまった。<br>私の頭では、多分一生読解できないでしょう。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |



|                          |            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |      |
|--------------------------|------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| ダ・ヴィンチ                   | 雑誌         | スガシカオのインタビューが読みたくて買ったんだけど、「ダ・ヴィンチ」っていまいちおもしろくないのよね。                                                                                                                                                                                                                                                                         | ☆    |
| 東京人                      | 雑誌         | 特集「昭和モダン建築」。<br>廃墟探訪がマイブームなのですが、わたしの好む廃墟はだいたい昭和初期に建てられたもの。<br>月並みだけど、やっぱ同潤会なんて、とってもいい。<br>同潤会青山アパートもあと2年で取り壊されることが決まっています。こうしてわたしの好きな建物たちはどんどん消えていってしまうのです…。しくしく。                                                                                                                                                           | ☆☆☆  |
| 冒険ぴあ                     | 雑誌         | 東京湾に浮かぶ3つの人工の要塞島（第一、第二、第三海堡）を探検しよう！という特集。かよこ隊員が図書館で借りたものをまわしてもらった(感謝!)。<br>わたしも近いうちに第二海堡を訪ねるつもり。<br>その模様は不定期特集「廃墟遊戯」に掲載予定なので、「海堡ってなんぞや???」という方はお楽しみに〜。                                                                                                                                                                      | ☆☆☆☆ |
| 李歐                       | 高村薫        | * 少年時代の暗い記憶を抱えた大学生・一彰は‘李歐’<br>と名乗る美貌の殺し屋と出逢う…*<br>あ〜、地味。でもすきよ。                                                                                                                                                                                                                                                              | ☆☆☆  |
| ホワイト<br>アウト              | 真保裕一       | * 雪に閉ざされた巨大ダムがテロリストに乗っ取られた…！自らの過失で友人を死なせてしまったダム職員・富樫は、ただひとりテロリストに立ち向かう*<br>骨太なストーリーで、緊張感のある展開。おもしろい。<br>ただ、事実を事実としてしか描かないために、主人公がテロリストと戦おうとする動機（確かに‘自分の過失で友人を死なせてしまったから’という動機づけがされてはいるんだけど）にいま一步説得力がない。<br>登場人物それぞれにそれらしい設定がされているにもかかわらず、その設定が全然生かされていなくて、人物の内面の描きかたも通り一遍で退屈。<br>このストーリーで、もっと情感を持たせることができれば最高だったと思う。もったいない！ | ☆☆☆  |
| 月刊カドカワ<br>〜95年7月号        | 雑誌         | 特集「柴田元幸自身による柴田元幸スペシャル」かよこちゃんが貸してくれたもの(感謝!)。50問の一问一答。<br><問 運命は存在すると思いますか。><br><答 僕が‘運命’と書くとしたらそのルビは‘なりゆき’とふります。><br>柴田さんのこういう感覚ってすごくすきだなあ。<br>柴田さんは「一部の読者でもいいから‘この人の翻訳なら絶対読む’って思ってもらえるような翻訳家がもっといたほうがいい」って話してるんだけど、わたしにとっては柴田さんがそういう存在。                                                                                     | ☆☆☆☆ |
| 富士山<br>〜第2号              | さくら<br>ももこ | 「コジコジ」の3年ぶりの新作が読めます！<br>今回もコジコジは真理です。                                                                                                                                                                                                                                                                                       | ☆☆☆☆ |
| ダンス・<br>ダンス・ダンス<br>(上・下) | 村上春樹       | * 失われた心の震えを取り戻すために「僕」は様々な喪失と絶望の世界を通り抜けていく…*                                                                                                                                                                                                                                                                                 | ☆☆☆☆ |

|                        |           |                                                                                                                                                                                                        |      |
|------------------------|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| 棄景<br>廃墟への旅            | 丸田祥三      | 「棄てられたもの」の写真集。<br>丸田祥三氏は廃線になった都電を追いかけるうちに<br>廃墟の世界に足を踏み入れたらしい。<br>棄てられた車両、線路、操車場…。魅力的。                                                                                                                 | ☆☆☆  |
| 棄景 2                   | 丸田祥三      | 「棄景」の続編。<br>「建築の黙示録」という写真集の中で、建築家の磯崎新氏<br>が‘廃墟は破壊された断片であり、多くの欠落部を生じ<br>ている。そこからかつて存在していた完全な状態を想像<br>する欲望にみちびかれる。それは消え去った完全性への<br>希求である。’と語っている。<br>わたしは最近、廃墟の魅力はその欠落感とか、不安全感<br>それ自体なんじゃないか、と思ってるんだけど。 | ☆☆☆  |
| 秘密                     | 東野圭吾      | 皆様ご存知の「秘密」。おくれればせながら読ませていた<br>きました。話自体は意外と悪くなかったと思う。<br>ただ、わたしには冒頭の奥さんが娘の身体で生活する<br>ことを受け入れる過程があまりにもあっけなくて腑に落<br>ちなかったのも、いまいちストーリーに乗れなかった。<br>いずれにしろ、これじゃ泣けないぞ。                                        | ☆☆   |
| ベル・エポック<br>第9巻<br>(漫画) | 逢坂<br>みえこ | 素材的には「永遠の野原」と同じ。<br>それでもやっぱり逢坂みえこはいいですね～。<br>たまには純粋に感動の涙を流したい、というあなたには<br>「永遠の野原」がおすすめです。恋愛モードのあなたには<br>「ベル・エポック」がよいでしょう。                                                                              | ☆☆☆☆ |



## 005 かよこちゃん

| 題名                                | 作者名                                                     | 感想                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 評価   |
|-----------------------------------|---------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| 冒険ぴあ                              | 雑誌                                                      | 特集「海堡に行く」<br>東京湾に築かれた人工の要塞島の特集。<br>そこには人々に忘れ去られた地のロマンがある。                                                                                                                                                                                                                           | ☆☆☆☆ |
| 国境の南<br>太陽の西                      | 村上春樹                                                    | 春樹さんの小説というのは、つい入り込んで読んでしまい、他の小説を読む時とは自分のスタンスもちよっと違う。でもこの作品の「僕」にはあまり共感できないなあ。幼い頃に心を共有していた女性との、妻も子もいる状況での再会。「僕」の行動は自分勝手な自己陶醉でしかないように思える。しかも自分の欠落感を他人で埋めようとするのは納得できない。春樹さんは「恋愛する」ってことがとっても好きな人なのかな？この辺が前面にでている作品はあんまり好きじゃないみたい。                                                        | ☆☆   |
| アーミッシュ<br>----もうひとつ<br>のアメリカ----- | 菅原千代志                                                   | 伸ばしたあごひげ、えりなしの黒い上衣。女性は長いワンピースにオーガンジーのキャップ。家族規模の農業を営み、馬車で移動する質素な生活。現代文明を象徴するアメリカに住み、その文明の恩恵を拒み平和主義を貫く人々——<br>そんなアーミッシュの生活風景を写真と文章で綴る。いつか訪ねてみようね、と友達と約束している。                                                                                                                          | ☆☆☆☆ |
| 神の子どもたちはみな踊る                      | 村上春樹                                                    | 最新作。次は三人称の小説を書く、と本人が明言していた通り、いつもの「僕」という語り口ではない短編連作。<br>「タイランド」「かえるくん、東京を救う」「蜂蜜パイ」の後半3作が面白かった。中では「かえるくん〜」が、いつものハルキワールドにとっても近いと思う。六つの短編のラストとなる作品は、春樹さんをイメージさせる作家の言葉で結ばれる。<br>「これまでとは違う作品を書こう。夜が明けてあたりが明るくなり、その光の中で愛する人をしっかりと抱きしめる事を、誰かが夢見て待ちわびているような、そんな小説を。」<br>前を見た、真摯な決意が語られ、感動的だ。 | ☆☆☆☆ |
| シティ・オブ・<br>グラス                    | 原作<br>ポール・<br>オースター<br>画<br>デビッド・<br>マズケリ<br>訳<br>森田由美子 | 図書館で予約をして<br>借りた本。小説を頼んだ<br>つもりが、漫画がきて<br>びっくり。<br>「一体、<br>私とは誰なのか？」<br>という、オースター作品<br>の基本的テーマを、原作<br>に忠実に取り上げている。<br>あんまり面白いので<br>絵も紹介させてもらい<br>ます。                                                                                                                                | ☆☆☆☆ |



|               |           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |       |
|---------------|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| ムーン・パレス       | ポール・オースター | <p>オースター作品の中でも取り分け奇妙な、独特の香りを放ち、その吸引力も強烈だ。</p> <p>主人公の青年は外の世界に自分からは働きかけず今あるものをそのまま受け入れるだけの生活をする事を決心する。必要なものしか持たない生活から、必要なものすら（お金、食べ物、友人、プライドその他いっぱい）持てない生活へ。全てが失くなった時に見えてくるものとは？青年は自分自身を被験者として、自己崩壊していく様を具体的に、ある意味滑稽に読者に見せてくれる。</p> <p>物語の中盤から後半は青年のルーツが解き明かされていく話になっていくが、並行していろいろな場所で起っていた事実が、一本に繋がっていく過程が面白い。</p>                                                                                 | ☆☆☆☆☆ |
| スプートニクの恋人     | 村上春樹      | <p>これではまるで、自意識過剰の恋愛小説という評価、当たってるじゃん、って感じ。ミュウとすみれの会話は読んでて気恥ずかしいし、ギリシャという舞台設定も、現実感がない。「僕」は引き過ぎていていつもの存在感がない。それと不倫相手を「ガールフレンド」と呼ぶのは辞めて欲しいなあ。</p>                                                                                                                                                                                                                                                      | ☆☆    |
| 広告批評          | 雑誌        | <p>「スプートニクの恋人」を書きあげてからの、村上春樹へのロングインタビューが掲載されている。本人が語る「スプ恋」評を再読してみた。本人曰く『「スプ恋」や『国境の南〜』は誤解を招き易い小説。『ねじクロ』はネジを緩ませてそこから何が出てくるかを見る、『スプ恋』は徹底的にネジを締める小説。」なんだそうです。そして『「ねじクロ」を集大成とみるなら『スプ恋』は、10年後に読んでみたら、ひとつの節目となる小説になっているだろう。』と自己評価してます。まあとにかく私はネジを緩めた小説が好きなのですが、春樹さんの最新作「神のこどもたちはみな踊る」を読み合わせると、彼が新しい方向を目指して行っているのを感じます。一人であるという意識を強く持ちながら、共感し合うことを大切にする、そんな春樹さんの主人公達もこの先変化して行くのでしょうか。それは進化か、退化か。楽しみです。</p> | ☆☆☆☆☆ |
| アンデルセンの童話 第3集 | アンデルセン    | <p>「マッチ売りの少女」：つい泣いてしまった。少女はきっと幸せの中で死んで行ったんだろう、他の誰にもそれはわからなくても。子供の頃はあまりに可哀想で苦手だったかも。</p> <p>「赤い靴」：赤い靴を履いて少女は踊り続ける。好きなお話だったけれど、今読んでみてとても宗教的で驚いた。二つのお話はどちらも、神様の御許に行ける幸せを描いている。何の心配も、不安もない世界に少女達は召されて行ったんだなあ…</p>                                                                                                                                                                                      | ☆☆☆☆☆ |



|         |           |                                                                                                                                                                                                                      |      |
|---------|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| リヴァイアサン | ポール・オースター | 小説家である「私」が、路上で爆死を遂げた友人の半生を、その係った多くの人達の人生を含め、小説という形で綴っていく。過度に精緻な良心、己の欲望を前にして罪悪感に傾きがちな性格、そんな主人公はある事件を契機にマイナス方向に向かって加速度的に落ちていく——そんなふうに見える。                                                                              | ☆☆☆  |
| 月刊カドカワ  | 雑誌        | 今は廃刊となっている音楽系総合雑誌。ちょっと本の整理などしていたら、95年7月号にとっても興味ある特集が！ポール・オースターの作品の大半を翻訳している柴田元幸さんスペシャル。一問一答、本人自身による作品解説などがあり、読み応え充分で面白かった。あみちゃんの紹介で知ったけれど、95年当時から、若い人の中では有名人だったのね。お顔も初めて拝見させてもらいました！月カドはいい雑誌だったなあ-----と、また改めて思っちゃった！ | ☆☆☆☆ |
| 棄景1・2   | 丸田祥三      | あみちゃんより、まわしてもらった廃墟写真集。棄てられたものたちが、肩寄せ合って、吹きすさぶ風を耐えている-----そんな姿に、ちょっと共感などしてしまいました。                                                                                                                                     | ☆☆☆  |

～ちょっとおまけに～

|                       |       |                                                                                                 |     |
|-----------------------|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| ギャラリー<br>フェイク<br>(漫画) | 細野不二彦 | ビッグコミックスピリッツ連載。<br>フェイク専門の画廊のオーナーが主人公。<br>弱きを助け、強きをくじく。けれど、世の中を斜めに見ずにいられない。画廊版ブラックジャックの趣。楽しめます。 | ☆☆☆ |
|-----------------------|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|



007yukoさんのショートストーリー

『夢 桜』

幕があがる前の静寂と、はりつめた緊張感が好きだ。

「私の舞う道成寺を楽しみにしていたあの人は、何処かで見ていてくれるだろうか。」

気持ちが徐々に、清姫のそれへと移っていく もう何も考えない。

鐘の中に身を隠した、安珍への狂おしい思いだけが、身体を支配する。

琴野は舞台の中央で、

清姫の心を持った白拍子花子へと、変身していく。

「琴野さん、これ渡してって、頼まれたんだけど……」

「えっ…？何？」

「私の絵の先生なんだけどね、この前の会の時、琴野さんの鶯娘に感動したんだって、」

封筒の中には、「先日の鶯娘は、素晴らしいの一言でした。

ぶしつけで、失礼だと承知の上で、あなたに会ってみたくになりました。

絵が、お嫌いではなかったら、是非おいでください。」

とメッセージを添えた個展の招待状があった。

迷った末出かける事にしたのは、美術館巡りが趣味な程の絵画好きであった為と、お稽古仲間の

「とても、素敵な先生よ、真摯な態度が、画風にもよく現れているの」という言葉があったからだ。これが、真島圭介との出会いだった。

圭介の絵は、淡い色合いが主で、油絵も素晴らしかったが、旅先でのスケッチ、明るく暖かい感じの水彩画は特に琴野の心を掴んだ。

「来ていただけるなんて、半分諦めていました」

サロンでコーヒーを勧めながら、圭介は本当にうれしそうに微笑った。

「そんな…こちらこそご招待いただいて、ありがとうございました。」

「こんなにお若い方だなんて、思ってもいなかった。日本舞踊は、もう長く？」

「ええ…12の時からです、もう20年程になります。

みんなが、塾だ、ピアノだって時、私はどうしても踊りを習いたくって…」

「本当に素晴らしかったなあ、白鷺の精の妖艶さと、はかなさと、哀れさと…それになにより、美しい」

「まあ、そんなに誉めていただくと、かえって恥ずかしくなります…」

「お好きな絵が、ありましたか？」

「もう…どれもすてきで…あの、桜のスケッチ…あれはどちらのです？」

「ああ、あれは和歌山の道成寺ですよ。」

「そうですか…道成寺…」

素晴らしい桜の絵だ、繊細で、優しい目で描いた桜の花…

真島圭介の人間性を如実に表している絵だ。

「私、あの絵大好きです」…圭介の目が、少し潤んだ。

「次の本会では、“娘道成寺”を踊りたい。何だか今はっきりそう思いました。」

「それは、良い…あなたに、ぴったりだ。」

「また、観に来てくださいますか？」

「…そうですね、観に行きたい…ぜひ」

真島圭介…1952年生まれ山口県出身…

パンフレットの彼の略歴は、華々しいものだった。

それなのに、そういった芸術家にありがちな、不遜な態度がまったく感じられない。  
琴野は、はじめて会った圭介に淡いときめきさえ感じている自分に驚いていた。

圭介から礼状が届き、  
琴野も何度か取り留めのない事を書いた手紙を送り、何ヶ月かが過ぎた。  
次の本会へ向けて、道成寺の稽古に打ち込んでいた琴野に、  
圭介が体調を崩し入院した、と言う知らせが届いた。  
どうしても、圭介に会いたかった。  
ためらいながら病室のドアをノックする。  
「あの…朝倉と申しますが、先生のお具合い…」  
言い終わらないうちに応対に出た上品な女性は、優しい笑顔を琴野に向け、中へ招き入れた。  
「あなた…お待ちかねの方が、いらっしゃいましたよ」  
ベットの上では、圭介が、スケッチブックに向かっている。  
「やあ！わざわざ来てくれたの？」  
「どうなさったんですか？驚きました…」  
「心配かけたね、もう大丈夫なんだよ」  
琴野は危うく涙が出そうになるのを、必死にこらえた。  
「朝倉さん、ちょっと彼の相手をお願いしていいかしら？買い物に行きたいし、家の方へも寄ってきたいの…」  
「少しなら、お散歩ぐらい、良いつて先生もおっしゃってたわ、お天気も良いし…外に出てみてもいいわよ」  
あたふたと夫人が出ていった後、二人は何となく気まずい思いで見詰め合った。  
「少し歩こうか…」  
病院の中庭には、一本の桜の木があった、散り初めの桜は何より美しい。  
「きれい…」こらえていた涙が、頬を伝う。  
「どうした…？」  
琴野は何も言えずただ、涙を流し続けた。桜の花が風に舞う…  
「切ないね…」圭介はそっとその肩を抱いた。

あれから一ヶ月も経たないと言うのに、あっけなく、圭介は逝ってしまった。  
天才画家の早すぎる死を、新聞の片隅が知らせていた。  
享年47歳、彼を知る誰もが、その死を悼んだ。  
琴野は道成寺を踊れなくなっていた、どうしても気持ちが入り込めない。  
知らなければよかった…愛しい人の温もりなんて…  
圭介の事を想うたびに涙が止まらなくなる。  
四十九日が終わった頃、琴野宛てに小包が届いた。  
「あ…これ、桜…」  
あの時、琴野が好きだといった桜の絵、裏返してみると、  
「舞い姫へ……K」とある。  
圭介の文字…  
見詰めていると、  
「楽しみにしてるよ…」  
圭介がそう言っているようだ。

幕が上がる。  
桜の花びらの中、琴野は静かに舞いはじめる…

読書リストに掲載されている中で、あまり世の中に知られていない作家たちのプロフィールを簡単に紹介していきたいと思います。これをきっかけに、読んでみよう、と思うかたが出てきてくれればうれしいです。では今月はy u k o さんからの紹介です。

巻末作家紹介-----時実新子

担当yukoさん

決して幸せではなかった20代、30代…そして、書くという事でのみ  
かろうじて自分を支える日々、それゆえの奔放な生き方、考え方を持つ川柳作家。

ぞんぶんに人を泣かしめ粥うまし  
わが胸で伐採音の絶え間なし  
二人共すこしずつ古い時々逢い

「親孝行なんて考えなくていいのよ。あの五歳ごろまでの  
愛くるしさで孝行は十分に果たしてくれているのだもの。  
では、二十年ほど私に遅れて生まれてきた他人の君たち、元気でね  
私は私の道を行くわ。バイバーイ」

17歳で母親の決めた人に強制的に嫁がされて、傷痍軍人だった夫の（精神も病んでいた）  
暴力に耐えそれでも夫婦生活をまっとうし、夫の両親を見送り、夫を見送り、58歳で本  
当に愛する人のもとに嫁がれた新子さんは、子供たちに対してこう言います。冷たいよう  
でも私にはすごくよくわかるなあその気持ち・・・

竹光に斬られて母は死んでやり  
無口な子今日は怒っている無口  
旅にいて思う長女のランドセル  
そして・・・子を生みしことは幻 天高し

## 表紙は語る

＜今月の表紙＞

額をはさんで、こちら側とあちら側。

夢と現実のように、それらは呼応<sup>よびあ</sup>っているのでしょうか？



## DOKU－GAKU掲示板

暑い夏が近づいてきました。  
D－Gも熱気が渦を巻いています。

では、ちかちゃんより特別ゲスト綾美ちゃんの紹介です。

ちかちゃんからみなさまへ♪

今回ゲストとして参加してくれた綾美ちゃんは、若かりしころのアルバイト先の先輩。  
綾美ちゃんと逢うたびに私の気持ちは、19のままさ、って感じです。  
綾美ちゃんは、ボランティアで点字翻訳をされていて、現在、多忙な日々を送っているよう  
ですが、実は、こっそりとDGの「ゲスト」から「レギュラー」の位置へと期待している  
人です。

綾美ちゃんのスタメン登場、楽しみにしてます。

さて、  
会員さんたちからのメッセージを、どうぞ。

がみちゃんより健ちゃんへ♪

ぜひとも「赤いペガサス」貸してください！ かよこちゃんかちかちゃんのおうちに置い  
おいてくれれば取りに行きます。そのとき、こうやって読むようにと注意書きをしておい  
ください。

かよこちゃんより綾美ちゃんへ♪、

「初めての出逢い」で紹介してくれた「銀のスケート靴」、私も好きですよ-----！  
お話そのものは、よく覚えてはいないけれど、「好き」と感じたことは、はっきり覚えてい  
ます。私も学校の図書館で読みました。たしか、あみ会員も「好き」って言っていたと思  
いますよ！

がみちゃんよりみなさんへ♪

いや～、大変なことになったなあをつくづく思うこのごろ。活字にすると表現力のない私の陳腐な文章は、自分の想いとは別なところをいつているみたい。私はやっぱりD Gの読者でいるべきだったかもしれない。(それも難しいかも……)

自分の文章を読んで、顔から火が出たり、青くなったりしております。

ただただ皆さんの読む本の多さ、広さにびっくり。

私の表現は、好きか嫌い、面白かったかつまらなかった、わかったかわからなかった——そんなものしかないんだと、つくづく自分が嫌やになった。

でも、見捨てないでね！

ちかちゃんよりかよこちゃんへ♪

有栖川有栖の江神さん紹介のところの写真を、4人組という関連だけでミスターチルドレンにしまい強引なこじつけた、と苦情はあるにせよ、私も早くその技術を習得したい。

ちかちゃんより編集さんへ♪

4号の表紙良かったです。

表紙を私物化しすぎて、と苦情はあるにせよ、私も早くその技術を習得したい！

苦情が出てるって事は、ほっときまして……

お誉めに与って、真に光栄であります！！

今月号はどうだったかな？

さて

DOKU-GAKU総務よりお知らせです。

◎ がみちゃんが副会長就任です。これからもよろしくね。

◎ 「初めての出逢い」綾美ちゃんのページに使った挿し絵(右・上)は、実は！インターネットでイギリスから持ってきました。(little princesで検索したものです。)

初めての海外へのアクセス。ドキドキものだったので、ちょっと報告です。

◎ 今月号ではy u k oさんが担当してくれた「作家紹介」は、綾美ちゃんからの提案です。作家を少しでも知ることによって、その人の作品を理解する手助けになったらいいな、と思っています。

綾美ちゃん♪

『本が好きだと言っても、好きな人は凄い人が多くて、私なんか読んだうちに入らないなとよく思います。知ってる作家でも簡単に略歴なんか書いてくれていると分かりやすいです。知らなさすぎる私には。』

◎企画・ちかちゃんよりメールにて送った、または今月号に同封してあるアンケートについての＜緊急報告＞です。

先日送らせていただいたアンケートのことですが、アンケートの答えの集まりが予想外に早く、も一、次号をまっちゃあいられない、ということで特別号として、アンケートだけをまとめることになりました。

今回は会員だけでなく、D Gを読んで下さっているありがたい方たちにもアンケートをお願いしています。

アンケートが回収され次第、特別号の準備にかかりたいと思います。

みなさん、お忙しいとは思いますが、

なにとぞなにとぞ、はは——(ひれ伏しています)よろしくお願いします。

D－Gにとって初の試みであるアンケート。

どんな回答が出揃うか楽しみです。

アンケート特集号・8月号

楽しみに待っていてください。

ではでは。

2000年6月1日発行

発行人 読書を楽しむ会

表紙 画・桜井和寿

印刷・製本 Ms factory



# 次号予告

## DOKU-GAKU 8月号

8月1日発行予定

投稿締め切り7/16

よろしくお願いします！！

特別企画は

『私の大好きな歌詞』です。

楽しいとき、悲しいとき、辛かったとき

あなたとともにあった、あの歌――

そんな思い出溢れる

あなたにとっての『最高の歌』を教えてください。

投稿待ってます！

DOKU-GAKU臨時増刊号

『アンケート特集』も

お楽しみに！

**暑さなんかブツとばす**

**DOKU-GAKU 8月号もよろしく！**